

「書く力」を育てるための4つのポイント

- 1 何のために？**

「書くことは考えること」。自分を見つめ、よさを発見したり、自分の生活を自覚したり、さらに他の人と交流したり……と、目的を明確にしましょう。
- 2 誰に向かって？**

先生や友達に伝えたくて書くことはもちろん、徐々に自分に向かって書いたり、不特定多数の人に訴えて書いたり、ということも考えられます。
- 3 どんな形で？**

詩、句、歌などの短詩型も、日記、新聞、創作、さまざまな〇〇カードなど、多くの形にチャレンジしましょう。
- 4 作品主義に陥らない。**

書きだしから書き終わりまで、きちんとした作品に仕上がらなくてもよしとしましょう。その時々のおねらいに合えば、書きだしだけでも大切な作品です。



「書くこと」の指導と「書くこと」に作文指導と切り替え、一つのきちんとした作品を書き上げることとをイメージしがちです。

指導者である先生方が、「作文は上手な文章でなくてはならない。カッコいい文章でなくてはならない。人をはっと思わせる文章でなくてはならない」と思い込んでいないでしょうか。

時には、しっかりと作品を書き上げることも大切ですが、日常の感想メモ、スピーチメモ、学級日記、手紙、ふり返りカード、カルタ作りなど、たくまへの「書くこと」の引き出しを用意しておくことが大切です。

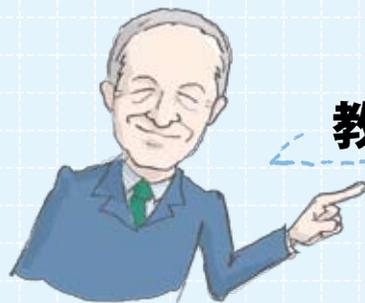
書き方を丁寧に教える

書かせる授業の後、子どもが書いた作文や文章を読み、「なかなか、いい文章が書けている。どうだったのかな」と、思わずつぶやいたりため息をついたりする。しかし、期待通りでないこのすべてが、子どもに責任があるのではない。

「未だ未だの文を書きなさい」「わかりやすく書きなさい」「……」のうちに、簡単な指示で書かせていることが多い。指示をすれば書けるだろうと思いついて入っているから、もし、そのとを子どもたちが、「書き方がある」とはどんな文章ですか」「書きたしはいつ書くのですか」と、質問や注文をしてくれれば、すぐに書かせることがなかったら、指示に素直にうなずいたり、わかったような顔をしたりする子どもたち、それを見て、書けるだろうと思いついて入ってしまったこと。これがいい文章

教える、寄り添う、そして自ら書く

よしなが こうし
京都女子大学教授 吉永幸司



が書けなかった原因である。指示だけでなく、書き方を念入りに教えることが、よい文章を書かせる秘訣である。

文章を書くときの葛藤に寄り添う

文章を書くときの子どもは真剣。真っ白なノートや原稿用紙に自分の考えをしっかりと書こうという気持ちで文章を書く。しかし、気持ちの通りに鉛筆が運ばないのが普通である。よい考えを思いついても、知っている語彙や語句が少ないので、上手に表現が出来ない。

書きだして立ち止まり、考えや言葉を探るのに時間がかかる。文のつながりができないなど、書くことは子どもにとって葛藤をともしなう学習活動である。

机上に提出された作文やノートだけでは、書くときの葛藤を読み取ることができない。それどころか、書けて当然と思いついて、結果の良し悪しを判断してしまつことが多い。文章の細部に心を配り、書くときの葛

藤に寄り添って文章を読むという心を大切にしたい。書くことは、全力を傾ける大変な学習活動であると思えることが、書く子を育てる秘訣である。

教師も書く

国語や算数、社会などのテストをするとき、問題に間違いがないかどうかのくらの時間があつても、正答は出せるかどうかを確かめるために、事前に模範解答を作る。理科では予備実験を念入りにする。

国語科でも、指導の前に教師が実際に書くということにしたい。模範解答や予備実験のように、教師が文章を書くことで、習得させた内容を具体的にイメージすることができる。子どもにこのような文章を書かせたいと思つただけでなく授業の前に、鉛筆を持って書く。このことで、授業の全体像が見えてくる。クラスの子どもを思い浮かべて書くことが、本時の目標を具体化する秘訣である。